

活躍する同窓生

女子弓道日本一

かぶき 由紀枝さん

二〇一四年九月に東京・明治神宮で行われた、女子弓道界最高峰・皇后杯(第四七回全日本女子弓道選手権大会)で、初出場で初優勝した方です。蕪木さんは、第四八回平成八年卒業の原町高校同窓生です。ご実家の鹿島区に帰省していた蕪木さんにお話を伺いました。

袴が穿きたかったのです

弓道を始めるきっかけは、月並みですが、高校入学時の部活動紹介で先輩方の袴姿を見て、素敵で格好良く、私も是非穿きたいと強く思い入部しました。

仮入部時には、男女合わせて二十人を越すほどの人で、人気が高かったのだと思います。しかし、本入部時には、男女合わせて十人いたかないかになり、女子は三人(二年生の時に四人)でした。当時は、心細いな、ぐらいにしか考えていませんでした。後で、高校弓道の団体戦は五人一組で試合に挑むと知り、自分たちの代には何とかして新入部員を多く欲しかったと思ったのは覚えています。

入部をすれば、すぐに弓に触れるし、的の中であられる、そう思っていました。先輩方が的中する音がパンと鳴るたびに、ドキドキしていました。はやく、早く引きたいと思っていました。弓の引き方の徒手体操のようなもの(弓を持たずに弓を引く動作をする)、ゴムの弓で引く張って離す稽古、先輩方の矢取り、弓道用語を覚えること、正直地味な事ばかりで楽しくありませんでした。でも、初めて弓を持ち、的に立ち、矢をつがえて引き



着物の着方、袴(たすき)がけ、弓道の動きの作法、道具の扱い方、等を、一から教えていただくことになりました。この時の練習量は週に四、五日。仕事が終わってから引きに行き、土日は福島県弓道連盟の講習会。そして大会。ほぼ休みな練習をしていました。それも先生の指導に励んでた。それもおかげで、四段、五段に昇段。錬士、六段は弓道仲間のおかげで昇格・昇段できました。今は錬士六段。次は「教士」を目指します。

選手権に出たい

五段になってから、漠然とですが、選手権を意識し始めました。根底にあるのは、「上手になりたい」。

社会人になって

高校卒業後社会人になり、二年くらい経った頃、急に弓が引きたくなり今の南相馬弓道場に直接伺いました。その頃は趣味の範囲で引いていたので、練習が月に一回なんて事もありませんでした。そうして指導してくださる先生と運命の出会いはありました。特に師弟関係を結んだ訳ではありませんでしたが、先生のおっしゃることに素直に従いました。

ここで、先生の指導の下、

しかし、この七月に、肺気腫(肺に穴が開き空気が漏れる病気)で手術をしました。すぐに退院はできたものの、日常生活もやつとの状態で大会に出られるのだろうか、と自問自答の毎日を送り、悔しくて涙が出て仕方がありませんでした。この切符を諦め、来年に賭けたとしても、同じく引けるのか。今までやってきたことがここで終わってしまうのか。八月に入り、弱い弓で練習を再開した時に、それまでの手応えがなくなっていました。無理かとも思いつつ、心の隅で「諦めるな、諦めたくない」そんな思いもありました。

これからのこと

地道に弓道をやり続けるだけです。三十代はやくに皇后杯をとりましたが、まだまだ力不足を感じています。この大会でも、かなわぬいなあと思われる場面がたくさんありました。来年はこの大会が伊勢市であるので、また出場したいと思えます。また、団体にも団体メンバーの一人として出場したいです。

後輩に一言

目標を持ったらあきらめず、自分の殻に閉じこもらず、他人の声を素直に聞くことが大切だと思います。私も、高校の時、芽が出ないで終わってしまった悔しさがあった。ここまで来れたのかもしれない。弓道はとても難しいです。難しいから楽しいのかもしれない。

インタビューを終えて

蕪木さんとお話して 弓道部長 星見 元輝

私が蕪木さんとお話して気付いたこと。姿勢がよく、礼儀正しいということがすぐわかりました。目をずっと合わせてお話ししていて、やはり日本一にふさわしい方だと思います。平常心で穏やかで一見のんびりそうに見える。でも、そこには全くの隙のないすごいオーラを感じました。もっと、お話をしていたかったです。

インタビュー担当から

「日本一」の方なのに、とても謙虚で、穏やかに、一言一言でいいにお話しされる方でした。二〇一一年十二月に結婚され、旦那様と一緒に来ていただきましたが、旦那様も弓道の国体選手です。これからの活躍を期待しております。



原町高校図書室で 蕪木さんご夫婦と、星見君 旦那様も弓道の国体選手です



【地域理解講演会】

4月17日、総合学習の時間で本校卒業生の青田智子さんに「復興の現状と課題」という演題でお話を頂きました。



講演の様子

私は、平成25年7月から復興庁で勤務し、他の職員と一丸となって「復興」という一つの目標に向かい取り組んでいます。被災地の抱える課題は自治体により多種多様であり、住宅用地の確保、商業・水産業

震災による甚大な被害からの復旧・復興はかなりの大仕事ですが、「未曾有の大災害からの復興」という前例のない業務は勉強になることが多く、また、非常にやりがいのある仕事です。

今後ふるさとである福島や他の被災地のために、一日も早い復興を目指し尽力していきたいです。



青田智子さん

金木犀の今と昔



懐かしい風景(約40年前)



現在